

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 10 日現在

機関番号：12013

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20730565

研究課題名 (和文)

聴覚障害学生の高等教育を支える学習ツールとしての手話通訳技術に関する分析

研究課題名 (英文)

Skills for sign language interpreters in higher education: Use as an effective study tool

研究代表者

白澤麻弓 (Mayumi Shirasawa)

筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・准教授

研究者番号：00389719

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：特別ニーズ教育、高等教育、手話通訳、学習ツール

1. 研究計画の概要

近年聴覚障害学生を受け入れ支援に乗り出す大学の数が急増し、特にノートテイクやパソコンノートテイクといった文字による支援の広がりが見られる。一方、ディスカッションや実習等より現場に即した高度専門教育を受けようとするほど、文字ではなく手話による支援の有用性が高まること指摘されているにもかかわらず、その利用は進んでいない。この理由として、高度な技術を有する手話通訳者が確保しづらいことのほか、より専門性の高い手話通訳者が高等教育現場において通訳を行ったとしても、手話による通訳の特性上、聴覚障害学生の学習を支えるツールとして利用がなされづらいことなどがあげられる。

そこで本研究では、高度専門領域における手話通訳について、聴覚障害学生の学習を支えるという視点から再評価を行い、ここで求められる技術の内容について詳細に明らかにする。加えて、手話通訳のみならず文字によるキーワード提示やスライドの同時提示、文字通訳との併用など、他の情報保障手段との効果的な相互利用を検討することで聴覚障害学生の学習ツールとしての手話通訳の在り方について明らかにすることを目的とする。

なお、本研究の過程では手話通訳と並んで重要な情報保障手段とされるパソコンノートテイクについても表示される情報の特性や必要とされる技術について明らかにし、手話通訳における技術と比較的に検討するものとする。

2. 研究の進捗状況

白澤 (2008) では、日本語から手話への通訳を分析し、手話通訳によって欠落しやすい情報について分析を行った。この結果、①接続詞表現や疑問・否定表現、節構造、フィラーなど文章構造や接続関係を示す語句が表現しづらいこと、また②強調表現や限定・懐疑表現等、モダリティ・ニュアンスに関わるも表現が脱落しやすいことが明らかになった。

これを受けて、松崎・白澤他 (2009)、吉川・松崎・白澤他 (2010) では、こうした情報の脱落を防ぎ、より必要な情報を効果的に伝達できる手話通訳技術について分析してきた。この結果、「専門用語に対応した手話語彙」「副詞的非手指動作」「領き」「話題化」等、訳出の評価に大きく影響を与える手話文法の要素を抽出することができた。

一方、白澤他 (2009a)、白澤他 (2009b)、白澤他 (2010) では、文字による情報保障の代表例といえるパソコンノートテイクについて、その特性を明らかにした。

今後これらの結果を統合し、高等教育機関にて真に必要とされる情報を伝達するための手話通訳のあり方を明らかにしていく予定である。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

(理由) 当初の計画では、手話通訳を補完する情報としてキーワード提示等の手法を検討していた。しかし、手話通訳をより深く分析したところ、伝達しづらいとされてきた情報についても、通訳技術によってカバーできる部分が多いことが明らかになり、研究の方向性を若干修正するに至った。その結果、手話通訳および文字通訳についてより深く

特性を把握することができ、本来の目的であった学習を支える手話通訳技術の解明に近づいたところである。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 聴覚障害学生の調査結果分析

昨年度実施した聴覚障害者に対するデータを元に、各教育段階に応じた聴覚障害学生のニーズの違いや求められる手話通訳の手法、さらには手話通訳では提示しきれない情報について詳細に分析する。ここでは特に教育段階ごとの求める内容の違いに着目し、分析を進めるとともに、これを補完する手法についても検討する。

(2) 付加的情報を利用した手話通訳技術

手話通訳及び付加的情報を用い、聴覚障害学生の学習を支えるツールとなる情報保障手段を提供していくためには、(1)に基づいて提示された付加的情報を手話通訳者が自らの訳出の中にシームレスに取り込み、聴覚障害学生の視線を誘導しながら全体として質の高い情報保障として完成させていく必要がある。ここではそのために必要とされる手話通訳の技法について明らかにするため、付加的情報を用いた手話通訳をいくつか撮影し、これに特有用な技法を取り上げ分析の手だてを検討する。

(3) 結果の整理

(1) および (2) の成果を元に、聴覚障害学生にとってより効果的な学習につながる手話通訳のあり方について整理を行い、この結果を学会等で報告するとともにここで得られた成果を広く社会に広げるための手法について検討を行う。また、データ収集過程で得られた聴覚障害学生のコメントから、こうした調査を実施すること自体が聴覚障害学生の手話通訳に対する認識向上に役立つことが明らかになったため、本研究の進行過程で得られた成果を元にワークショップ等の開設も検討している。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 白澤麻弓 他7名、利用者の視点から見た文字通訳技術—手書きノートテイクおよびパソコンノートテイクを中心に、通訳翻訳研究、第8巻、141-157、2009年、有
- ② 白澤麻弓 他14名、文字通訳による入力文の評価に関する研究、通訳翻訳研究、第9巻141-157、2009年、有
- ③ 白澤麻弓 他14名、パソコン文字通訳に

おける連係入力のプロセス分析、通訳翻訳研究、第10巻、21-37、2010年、有

[学会発表] (計6件)

- ① 白澤麻弓、高度専門領域における手話通訳に求められる技術の分析②—訳出過程で生じる情報の欠落とその内容—、第46回日本特殊教育学会、2008年9月20日、米子コンベンションセンター
- ② 白澤麻弓・松崎丈 他12名、パソコンノートテイクにおける連係入力の入力過程に関する分析、日本通訳翻訳学会第10回大会、2009年9月5日、金城学院大学
- ③ 松崎丈・白澤麻弓 他3名、高等教育における手話通訳の技術的ニーズの分析、第47回日本特殊教育学会、2009年9月19日、宇都宮大学
- ④ 白澤麻弓・松崎丈 他5名、文字通訳による入力文の妥当性に関する分析、第47回日本特殊教育学会、2009年9月19日、宇都宮大学
- ⑤ 吉川あゆみ・松崎丈・白澤麻弓 他4名、大学院における手話通訳評価項目の試案作成、第48回日本特殊教育学会、2010年9月18日、長崎大学
- ⑥ 白澤麻弓 他7名、パソコンノートテイクにおける連係入力のプロセス分析、第48回日本特殊教育学会、2010年9月18日、長崎大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]